

# 北海道登別青嶺高等学校

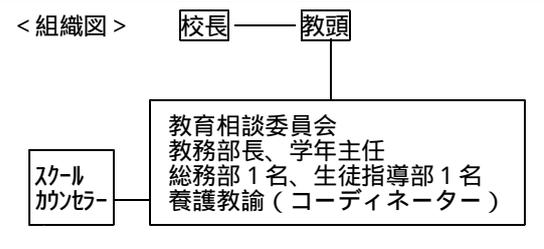
課程 全日制  
学科 普通科  
生徒数 472名

## 1 取組の特徴

「Hyper - QU」によって、生徒個々や学級集団への理解を深めるとともに、学校行事や授業における取組を通して、望ましい人間関係の構築を図る。

## 2 取組のねらい

- 1 集団カウンセリングやロールプレイングによる良好な生徒集団の形成
- 2 「Hyper - QU」のデータを生かした、よりきめ細かな生徒対応
- 3 教員のカウンセリングスキルの向上
- 4 スクールカウンセラーを活用したカウンセリングの充実



## 3 取組の経過

- 教育相談委員会は毎月1回実施  
スクールカウンセラーによる年間20回の  
カウンセリング
- 4月 1学年宿泊研修における集団カウンセリング  
(講師 スクールカウンセラー)
  - 6月 「Hyper - QU」の実施(全学年)
  - 7月 「ほっと」の実施(全学年)  
「断り方」を学ぶロールプレイングの実施  
(1年国語総合の授業)

- 9月 「Hyper - QU」に関する校内研修
- 11月 コミュニケーションスキルを育むトレーニングの実施(1年国語総合の授業)  
校内研修会「生徒への関わり理論と応用」(講師:本校スクールカウンセラー)
- 2月 「ほっと」の実施(1、2年)  
保健室来室が多い生徒との面談(1、2年)

## 4 取組の内容

### 1 集団カウンセリング(4月実施 1学年宿泊研修)

- (1) ねらい 構成的グループエンカウンターを通して人間関係を構築し、高校生活への不安を解消する。
- (2) 対象 1学年全員
- (3) 内容 3種類のエクササイズ「仲間集め」「難破船ゲーム」「トラストバック」を行った。
- (4) 成果 明るく前向きな雰囲気で行うことができた。また、このエクササイズによって話したことがない生徒同士の交流が生まれるなど、人間関係構築の一助となった。

### 2 「Hyper - QU」(検査は6月実施、校内研修は9月実施)

- (1) ねらい 学校生活における生徒の意欲や満足感、学級集団の現状を把握することによって、不登校やいじめなどの未然防止に努める。また、検査によって知り得たデータを活用することによって生徒理解を深める。

## 4 取組の内容

- (2) 対象 全学年
- (3) 内容 6月にLHRの時間に「Hyper - QU」を実施し、このデータをもとに、9月に「Hyper - QU」に関する校内研修会を実施した。前半は教育相談担当者が講師となつて、「Hyper - QU」の概要と、本校の傾向について説明した。後半はいくつかのグループに分かれて、検査の結果から気になる生徒の支援について話し合いを行った。
- (4) 成果 検査を通して、今まで気付くことができなかった生徒の一面について理解を深めることができた。また、HR担当が検査を基に面談等を実施することによって、問題の未然防止に役立てることができた。



### 3 コミュニケーションスキルを育むトレーニングの実施 (11月 国語総合の授業)

- (1) ねらい 悩みを聴き、答えるためのスキルについて学び、日常生活で生かせるようにする。
- (2) 対象 1学年全員
- (3) 内容 まず、悩みを聴くために傾聴や思いやりなどが必要なことを学習した。その上で、新聞の悩み相談に投稿された悩みに文章で答える学習活動を行った。
- (4) 成果 悩みを聴くための具体的なスキルについて学ぶことができた。また、実際の悩みに文章で答えるという活動を通して、他者の立場を思いやることの大切さを実感することができた。

### 4 スクールカウンセラーを招いての校内研修会(11月)

- (1) ねらい 教員による生徒への教育相談的アプローチの方法を身に付ける。
- (2) 対象 本校教員
- (3) 内容 特別な支援を必要とする生徒への支援の手立てについて指導、助言を受けた。
- (4) 成果 生徒に肯定的、受容的に接することや、アサーティブな関わり方の重要性について、理解を深めることができた。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- (1) その他の指標による評価
  - ・一人当たりの欠席日数の減少 平成23年度 8.88日 平成24年度 7.95日  
(平成24年の数値は12月末現在である。)
- (2) ボランティア活動等体験の参加者数増加 平成23年度 68人 平成24年度 145人
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況  
コミュニケーションに関する13の要素の中で、「挨拶や感謝」、「発言や説明」は全道平均より高い数値であった。しかし、「拒否」、「助言や注意」、「緊張」など、コミュニケーションに困難を要する場面の数値は軒並み全道平均を下回っており、特殊な場面のコミュニケーションを苦手とすることが多いと推察される。
- (4) 生徒の変容した姿  
困り感を抱える生徒に声をかけるなど、他者への配慮ができる生徒が徐々にではあるが増えてきた。また、1学年においては例年よりも生徒会執行部に入ることを希望する生徒が増えるなど、集団に積極的に貢献しようとする姿勢が見られるようになった。

### 2 課題

- (1) 教師が把握しづらく表面化はしていないが、潜在する支援を必要としている生徒への対応
- (2) 困り感を抱えている生徒の保護者との連携

### 3 次年度に向けて

- (1) 悩みを抱える生徒に対応するため、教員のコミュニケーション能力の一層の向上を目指す。
- (2) 生徒間の望ましい人間関係、居心地のよい学級集団を形成するため、生徒のコミュニケーション能力を向上させる取組を充実させる。